

常照

第790号

開基住職往生に思うこと

八月の末、親しくお付き合いをさせていただいているお寺の前住職様が往生されました。それもご自分の誕生日の日に。今年の六月末、住職継職法要を執り行い、息子に住職を譲られました。本来の継職は来年の予定をしていました。ところがご自分の命が、病のため来年まで持たないと医者に告げられ、継職法要を前倒しで、急遽今年六月に執り行い、それ

から二カ月で往生されました。

開基住職として四十年以上の長きにわたり札幌の地で都市開教のご苦勞にいそしまれ、お念仏のみ教えを広く伝え、現在にはたくさんの檀信徒を持つお寺になりました。

朝ドラ「なつぞら」の北海道開拓者精神に通じるような、念仏のみ教えを広めたいという強い気持ちと、理想をかけた、初めに坊守さんと駅前で、手書きのガリ版刷りでチラシを配り、当初三軒の檀家さんからスタートして五人の子供を育てながら、毎年檀家の皆様に、大根のたくさんを漬けて、一軒一軒に持っていった配るなど、様々なご苦勞を重ね精進されました。

私のような既に作られたお寺の継承をさせていただいている者にとつて、そのご苦勞を聞かせていただくと、唯々頭が下がる思いであります。

常々「俺はやりたいことだけをやってきたから、死ぬことは悔いないし、怖くもないんだ」と言っていました。

余命あと一年というときに、昨年九月六日、胆振東部地震が発生し北海道に甚大な被害をもたらしました。震災二日後に、ご自分の病をおして、道路が復旧していない中、一人で車を運転して、本堂が傾き全壊の被害を受けた厚真町の同派寺院を訪れ、発電機を届け、その住職に「俺は来年まで持たないから」と言っていたことを聞きました。

ご自分の残された時間を、いち早く人の悲しみにどこまでも寄り添っていく、そういう人でもありました。

「俺は地獄へ行くから、お宅の前任にもよろしく言つとくから」継職法要の前日に電話でいろいろな話をしていた時におっしゃった一言です。

お念仏をいただき、そのお慈悲の中に生かされる絶対的な安心の上にたつていたからこそその言葉だったのでありましよう。

「いずれの行もおよびがき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」親鸞聖人のお言葉であります。

自分の執われ心である煩惱は、どんな修行をしても、決して取り去ることはで

照

常

(3)

きません。迷いの中で、もがき苦しんで地獄行きの業を積み重ねていくしかない私であります。

その私に『安心して私にまかせなさい』のお喚び声をお念仏の中にお聞かせいただき、唯々「ありがとうございます」と、いただいて生きていくことの大切さを教えてくださったことであります。

振り返って、自分のいのちの期限が判ったとき、自分自身はどうなるのか？今思うことは「死にたくない」という、もどかしい気持ちはハッキリ言えることです。どうしようもない不安に押しつぶされることでしょう。これだけお聞かせいただいているにもかかわらず、この世への執着心は燃え盛るばかりです。

唯円坊が、常々お聞かせいただいている阿弥陀様の働きで浄土に往生することに、歓び踊るほどの心が起きないというこの疑問を親鸞聖人にお尋ねになった時、親鸞聖人は「同じ不審ありつるに」とおっしゃいました。聖人も同じ気持ちで、同様のことを思っておられたのだとホッとします。

聖人は、歓び踊るほどの心を遮っているのは、執着心という煩惱がそれを抑えているのだから、歓べないのは当然である。煩惱をしっかりと持っている我々を、煩惱があるからこそ救ってくださる阿弥陀様の御心が、本当に頼もしく思うとお説き下されたことに、深く頷かされることであります。

只生まれ

只去りゆくぞ

染しけれ

弥陀の誓いの

あつかり思いよ

皆かりと

我が人生を

正蔵す

遠くあかりの

道をたずねて

釋 顯 道

十一月の常例布教(こ法話)のご案内

○前期 十一月七日(木)～十一日(月)

講師 未定

○後期 十一月十三日(水)～十六日(土)

熊本教区球磨組 聚教寺

講師 恒松 見照師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使のご法話を
して頂きます。どうぞお誘い合わせいただ
ご聴聞にご来院くださいますよう、お待ちし
ておます。

発行所

☎047-0017

小樽市若松二丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (〇一三四) 二二一〇七四番
FAX (〇一三四) 二二一〇八四番
テレホン法話 二七十一六一六番